

中世文書を読む(十二) 児玉元良の書状



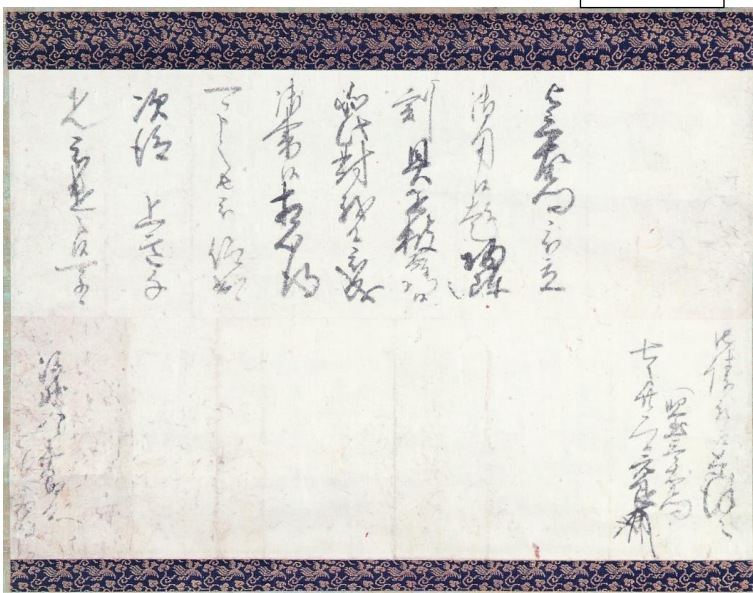
史料1は、戦国大名毛利氏の家臣児玉元良が出した手紙です。

この文書を題材に、文書を読み解く過程を紹介し、謎解きの楽しさを味わっていただくと思います。

順番(1)~(20)「見ようね」

① まず、史料1のくずし字を漢字でかなに直すと、Aのようになります。
 それぞれ、今の日本語に直すと、Bのようになります。
 児玉元良が、河野八郎三郎に宛てた手紙です。

史料1



②

- ◆ この手紙によると、次のことが分かります。
- ◆ 河野与三左衛門尉が戦死したこと。
- ◆ このことを児玉元良が帰陣の際に殿様に報告したこと。
- ◆ 殿様は、児玉元良宛てに手紙を書き、河野氏の事情をくんで適切に計らうよう命じたこと。
- ◆ 「上意」からは、銭「千足」(今のお金で約百万円)が支給されたこと。

A

与三左衛門尉被立
 御用候趣、帰陣之
 刻、具遂披露候
 如此对我等被成
 御書候、相心得
 可申之由被 仰出候、
 次従 上意千
 足被遣之候、可有

御請取候、恐々謹言

児玉三郎右衛門尉

七月廿二日 元良(花押)

河野八郎三郎殿

お受け取りください。恐れながら、謹んで申し上げます。

児玉三郎右衛門尉

七月二十二日 元良(花押)

B

河野与三左衛門尉が戦死したことを、帰陣した際に、詳しく殿様に報告しました。このように、私宛ての書状も頂きました。事情をくんで適切に計らうようお命じになりました。

次に、「上意」から千足(約百万円)支給されました。

河野八郎三郎殿



③ 宛名の河野八郎三郎と、戦死した与三左衛門尉って、だれ？
どんな関係の？



④ まず、河野三左衛門尉は、元龜2年（1571）正月、毛利元就から与三左衛門尉に任じられた人物で、任じられる前は「八郎太郎」と名乗っていました。

⑤ 彼（八郎太郎）の前に「与三左衛門尉」と名乗った人物は、天文23年（1554）5月に五日市（今の広島市佐伯区）で合戦し、毛利元就・隆元から褒められています。そして、同年8月には、毛利元就から北庄（今の広島市安佐南区）で給地を与えられました。これらのことから、この与三左衛門尉は、彼（八郎太郎）の父親と考えられ、親子共に毛利元就の家臣であったと推定されます。



⑥ 史料によると、河野八郎三郎は、与三左衛門尉の戦死の知らせを受け、見舞金「千疋」を受け取っています。後にその跡を相続したようです。八郎太郎と八郎三郎は、名前もよく似ていますので、兄弟か、その関係でしょうか。

⑦ 差出の児玉元良って、なにもの？
殿様、上意って、だれ？



⑧ まず、児玉元良は、戦国大名の毛利元就の家臣で、父親の児玉就忠の跡を継いで元就の奉行人（官僚）を務めます。元龜元年（1570）頃、元就から孫の輝元のもとに派遣され、毛利氏の当主の輝元を支えます。



⑨ したがって、殿様とは、当主の毛利輝元のことと思われる。「上意」とは、殿様よりも上の立場の者のこと、戦死した与三左衛門尉は毛利元就の家臣でしたので、彼にこの主人・親分は毛利元就。したがって、「上意」とは、毛利元就のことと推定されます。

⑩ 与三左衛門尉の戦死を報告した際殿様の毛利輝元が児玉元良死にて書状を書いたようだけれど、残っているの…



⑪ 写りが残っています。史料こそ御覧下さい。今のようでも、直つてみました。



史料②

河野与三左衛門尉用にて
立候、神妙候、能々可
申聞候、謹言、
六月十日 輝元御判
(墨引) 児三右 輝元

⑫ あれれ…
毛利輝元が史料②の手紙を書いて児玉元良に渡したのが6月10日。
児玉元良が史料①の手紙を書いて史料②の毛利輝元の手紙とともに河野八郎三郎に渡したのが7月22日。
一か月半月日が、たつてゐるよ。



河野与三左衛門尉が戦死してしまつた。神妙である。(家族に対し)しっかりと事情をくんで説明し、諭すように。以上、謹んで申し上げます。
六月十日 (毛利) 輝元判
児玉元良 輝元

⑬ いよいよ、気付いたね！このタイムラグの原因が、この手紙の年代を推定するカギになると思います。



⑭ ④で述べたように、戦死した与三左衛門尉は、毛利元就から元龜2年(1571)正月に「与三左衛門尉」に任じられました。毛利元就は、同年の6月14日に死去するので、元就が河野与三左衛門尉の死を悼み、見舞金「千疋」を支給できたのは、自らが死去する6月14日以前に限られます。

⑮ したがって、毛利輝元が史料②の手紙を、児玉元良が史料①の手紙を、それぞれ書いたのは、この年、すなわち元龜2年だったと推定されます。



⑰ 表1 元龜2年(1571)の出来事のまとめ

月 日	出来事
正月9日	毛利元就が河野八郎太郎を与三左衛門尉に任じる。
	河野与三左衛門尉が戦死する。
	児玉元良が吉田に帰り、毛利輝元に与三左衛門尉の戦死を報告する。
6月10日	毛利輝元が児玉元良に宛てて手紙(史料2)をしたためる。
	毛利元就が見舞金として「千疋」を支給する。
(6月14日)	毛利元就が死去する。
7月22日	児玉元良が河野八郎三郎に宛てて手紙(史料1)をしたためる。

⑱
与三左衛門尉の戦死にまつわる
出来事を、
時間の流れに沿って
表1にまとめてみました。

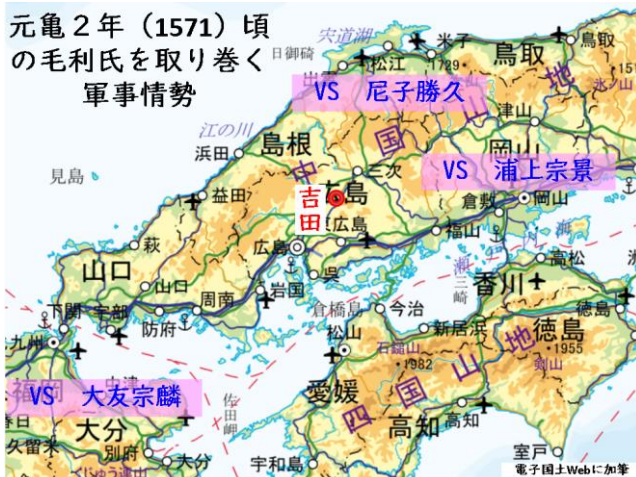


⑲
御名答！
河野与三左衛門尉の戦死の知らせを
病床で受けた元就は、
見舞金「千疋」の支給を指示した後、
病状が急変したと考えられ、
14日に帰らぬ人となりました。
その後、毛利家の人々は
葬儀をすませ、
死後の法要を執り行いました。

⑳
なるほど！
6月10日の毛利輝元への報告から
7月22日の
河野八郎三郎への知らせまで、
1か月半も月日がかったのは、
この間の6月14日！
毛利元就が死去したからだね！



元龜2年(1571)頃
の毛利氏を取り巻く
軍事情勢



㉑
元就の死に関わりなく
戦争は続いています。
出雲国(島根県)では尼子勝久と、
備前国(岡山県)では浦上宗景と、
筑前国(福岡県)では大友宗麟と、
毛利軍は戦闘中でした。
大黒柱の元就を失った毛利氏では、
これらの軍事・外交を始めとする
様々な政務に対応しながら、
元就を自送る儀式も行っとなし、
多忙を極めたことなのでしょう。